

壇ノ城跡試掘調査報告書



庄川町教育委員会
庄川町文化財保護委員会

はじめに

庄川町教育委員会

南北朝から戦国時代の城跡として、文献に散見される壇ノ城（庄ノ城ともいう）跡に、県営ほ場整備事業（雄神地区第15工区）の計画がなされ、「埋蔵文化財包蔵地に係る土木工事」として、施行者である富山県（砺波農地林務事務所長）から、昭和58年8月、本委員会に対して協議がなされました。

本委員会としては、さっそく町文化財保護委員会を開催して検討の結果、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て試掘調査を行うことになりました。幸い地元の方々、特に耕作者である加口多喜堆・坂口正一・式部忠雄・長谷良作・広谷平藏の各氏及び所有者の藤井秀直・村井満弘の両氏の承諾を受けて、秋の刈り取りが終わった後、10日という短期間で実施する運びとなりました。

埋蔵文化財センターから池野正男氏が派遣され、発掘作業員として地元雄神公民館長西元栄吉氏にお世話をいただいた雄神地区の方々15人によって、10月3日からいよいよ発掘に着手いたしました。期間中降雨による作業中止もあって、10月21日には調査を終えることができました。

調査報告書の作成及び出土品の整理が、埋蔵文化財センターの手によって異例のスピードでなされ、11月14日には、さっそく町教育委員会と町文化財保護委員会の合同による報告会を開催、各委員の意見も交わされました。

埋蔵文化財は現状保存がもっとも望ましいが、耕作者にとっては多年の念願であるほ場整備事業を是非実現したいとの意向も強く、これらを配慮して文化財保護委員会から、協議のあった施行責任者（県）に対して、「調査報告書を尊重され、遺跡の崩壊を最小限度に止めて施工されたい」との回答を行ったのであります。

関係機関、地元土地改良区等におかれでは数次にわたり会議を重ねられた結果、当面は場整備事業は中止されることになり、地中に眠ったまま保存されることになりました。

この尊い決定をされました関係者、特に耕作者には深甚の敬意を表するとともに、この試掘調査の指導、報告書の作成をしていただいた富山県埋蔵文化財センターの方々に厚く御礼を申し上げます。

（昭和59年8月20日）

壇ノ城跡試掘調査報告書

1. 遺跡所在地 庄川町庄字上壇 4846 番地外
2. 調査主体 庄川町教育委員会
3. 調査担当者 富山県埋蔵文化センター 池野正男氏
4. 調査期間 昭和 58 年 10 月 8 日 ~ 14 日 (7 日間) 発掘
10 月 17 日 ~ 21 日 (3 日間) 埋めもどし
5. 調査の目的 ほ場整備事業に先立ち、遺跡の有無、範囲等を確認する。
6. 調査方法 ほ場整備事業実施範囲約 $7,400 m^2$ を対象として、幅 1 ~ 2 m のトレンチを 10 m 間隔で試掘した。
7. 調査結果
 - 1) 遺跡の立地 庄川の右岸、段(壇)の山と呼ばれる西方に突き出した台地上に位置する。
 - 2) 遺跡の現状と層序 遺跡の地目は水田、畑、開田による掘削は北東側で若干認められるが、全体的には旧地形を比較的よく残す。
基本的な層序は、1 層 耕作土(約 20 cm), 2a 層 暗黄褐色土(約 5 cm) が部分的に認められる土層で造構構築時の整地層、2 b 層 暗茶褐色土(0 ~ 50 cm), 多くの炭化物を含み、部分的には炭化物層となって認められる。遺物の大部分は、この層中に含まれ、強い熱を受けた痕跡を残すものが多い。
 - 3) 遺構 遺構は台地上全体に広がり、溝、柱穴、礎石、礎石下の砾石群、石敷・石列等が多数認められる。
石敷、石列、礎石等は表土層直下に認められる。
 - 4) 遺物 出土遺物には、縄文土器数点、奈良～平安時代の須恵器、土師器 10 点、珠洲焼、越前焼 100 点、青磁、白磁、染付、天目茶

碗、瀬戸焼等の陶磁器 20 点、土師質小皿 200 点、瓦質土器 10 点、硯・砥石 3 点等がある。

5) 遺跡の範囲 ほ場整備事業計画地の 7,400 m² 全体。

6) 遺跡の時代 遺跡の主体となる時代は、室町時代末～戦国時代の 15～16 世紀を中心とした年代である。

8. 工事計画と
の 関 係 遺構及び遺物包含層が表土直下から認められるため、現状で削平可能な部分は無い。

(計画削平面積 約 4,000 m²)

対応策 ① 土砂搬入盛土

急峻な地形で、狭い道路のためかなりの費用を必要とする。

② 町史跡であることからも町で土地を買い上げ遺跡公園化する。

③ 本調査（削平計画部分を対象）

面積 約 4,000 m²

費用 2,200～2500 万円

期間 5～6 か月

〈参考〉 堆神地区ほ場整備事業は、第 15 工区（調査地区）事業費は 1,000 万円程度。

壇（庄）ノ城跡について

1. 城の規模

調査からは、土塁・堀等は検出されなかった。このことから、城は急峻な地形を天然の要害として利用し、また、台地全体を城域としている。

台地の広さは、天文年中（1532年～）のものと言われる「金子文書」に記述されている「城の規模は東西55間（99m）、南北48間（86m）」にはほぼ一致する。

2. 遺構

遺構は、調査区全域に認められるが、特に南側に密集する傾向にある。

建物の規模及び配置は、今回の試掘調査で明確にできなかったが、礎石を使った建物、掘立柱の建物、溝に囲まれた建物群の存在が推定され、また、石敷（直径5～10cmの河原石を敷きつめた遺構）・石列（人頭大ほどの河原石を並べた遺構）・乱石積の遺構（中庭及び池跡の可能性あり）等が確認できた。

また、地山層に掘り込まれた溝・穴・柱穴等の数は非常に多い。

遺構面は表土層直下からはじまり、かなりの規模で、掘削及び盛土の整地作業を施した痕跡が認められる。その盛土層は表土層直下に認められる暗黄褐色土層で、遺構はこの土層を掘り込んで構築されている。

遺構群は、重複（切り合い）もかなり認められ、かなり頻繁に遺構が作り変えられたことがうかがえる。

さらに、遺物包含層になっている暗茶褐色土層中には多くの炭化物を含み、場所によっては、炭化物層となって認められる。このことは、建物群（城）が何らかの形で幾度か焼失したことが推定され、今回の調査の伴出遺物の状況から、16世紀前半頃に一度焼失したことが判明した。この頃の状況は、文献上からは、永正7年（1510年）上杉頸定が高梨摂津に討たれた後、庄城には、長尾為景が居住したとか、天文年中（1532年～）には石黒与三右衛門が居住したが、上杉謙信に攻められて城を明け渡し退いたとあり、上記の城の焼失もこの頃であろう。

3. 遺 物

出土遺物には、明代（中国）の青磁、染付、瀬戸の天目茶碗、灰釉陶器、越前焼、珠洲焼等がある。遺物の内訳は、戦国時代の城館跡として有名な福井の朝倉遺跡の出土遺物と同様で、また、遺物の形態も似ていることから、室町時代末頃に出土遺物の年代を求めることができる。

壇（庄）城が文献に登場するのが、貞治元年（1362年）・応安2年（1369年）で、二宮円阿の軍忠状があり、それによれば、野尻・庄・松倉城で、元越中守護桃井直常と合戦したことが知られる。

今回の調査では、14世紀後半の遺物は明確でなく、文献上のことがらを裏付けるに至らなかった。ただし、台地西端に位置する弁天温泉を建設した際に、かなりの珠洲焼等が出土しており、台地西端にこの時期の遺構が存在する可能性もある。

4. 遺跡の重要性

今回の試掘調査から、室町時代末～戦国時代の遺構群及び文献上の記述内容をおぼろげながら裏付けることができた。

また、台地全体に遺構が認められ、その中には、礎石を使った建物の存在が推定できるなど、大規模な居館跡であることが判明した。

庄川町の遺跡は総数7か所（内訳：縄文時代1、中世の城館跡3、寺跡1、塚2）と非常に少なく、この中でも規模、内容から縄文時代の松原遺跡、中世の壇城跡は、双壁をなす重要な遺跡であり、現状保存が望まれる。

遺構・出土品写真



発掘作業



調査地(台地)遠方は砺波平野



栗石と柱穴



礎石・石列



発掘作業



礎石



柱穴(手前)礎石



礎石



栗石・石列・礎石



柱穴(手前)と溝



やや南北に伸びる溝



交差している溝と礎石(遠方)



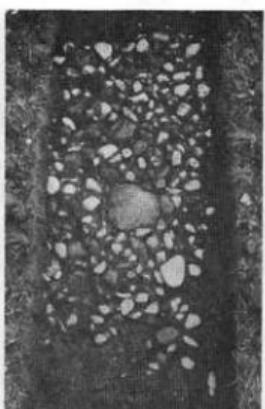
栗石



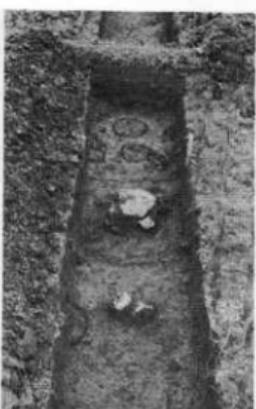
栗石



石敷と柱穴(遠方)



石敷と礫石



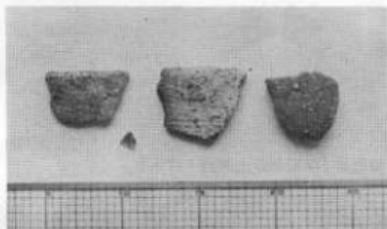
礫石と柱穴(遠方)



石列



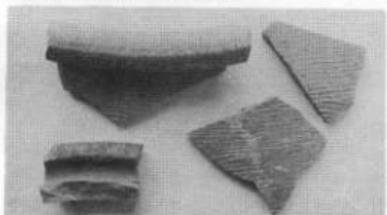
石列



縄文土器と黒耀石の剥片(小)



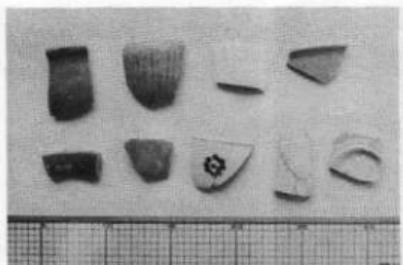
須恵器



珠洲焼(水がめの類)



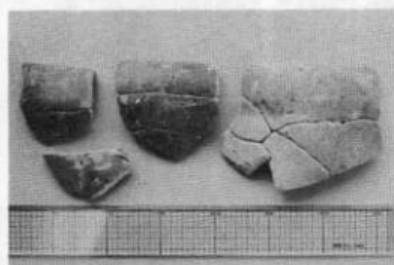
土器器



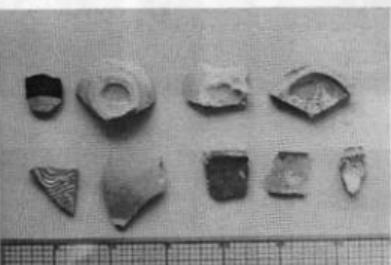
磁器(青磁・白磁など)



陶磁器(瀬戸焼など)



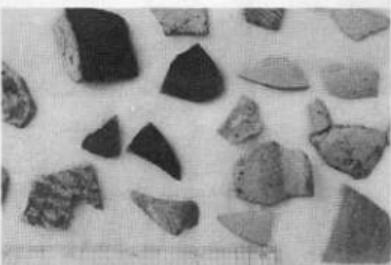
火鉢(越前焼)



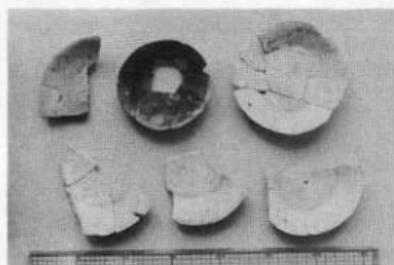
陶磁器(天目茶わん 2片ほか)



すり鉢(越前焼)



須恵器(平安期の土師器 1片あり)



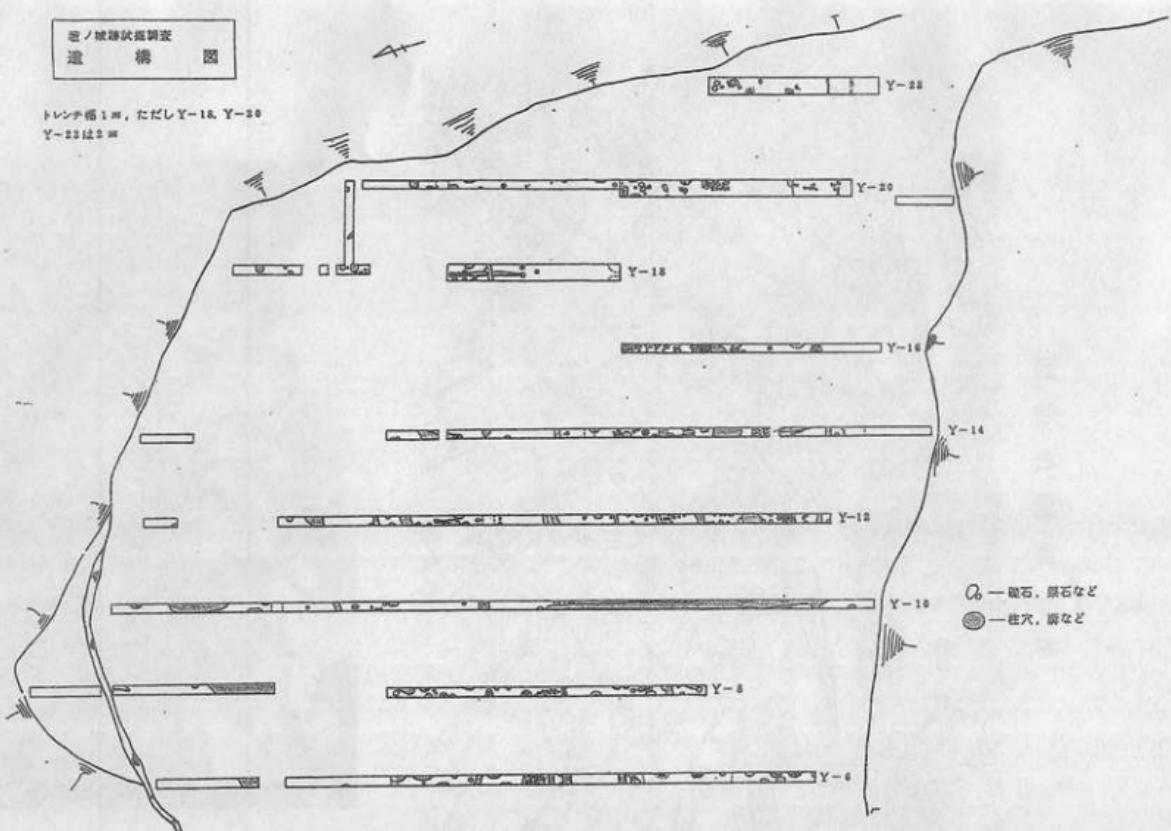
土師質の皿類



硯(右)・砥石(中央)

老ノ城跡地調査
遺構図

トレシテ幅 1m, ただし Y-18, Y-20
Y-23は2m



壇ノ城跡付近図



見学者でにぎわう発掘現場